

# アトリエ 琉游舎 だより 121号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年12月29日発行



## 謹賀新年



- ★今年もみんなで作る琉游舎をよろしくお願ひいたします
- ★定例会は読書会 映画会 写経会、をやっています
- ★皆さんのこんなことしたい あんなことやりたいがあったら  
お知らせください 是非一緒にやってみましょう

○写経会は毎月第一日曜日に行います。(1月は2週目です) 初めての方も写経に必要な道具一式ご用意しています。手ぶらでお越し下さい。手本をなぞる方法、経文を隣に置いて白紙で写経する方法など、お好みの方法で写経して下さい。文字に一心に向かい合っていると1時間という時間はあっという間です。

○読書会は法華経、歎異抄、般若心経、ダンマパダ、立正安国論と読んできました。次回から(1/11)「阿弥陀経」を読みます。極楽浄土の姿をインド人はどのように想像し描いたのか、とても興味深い経です。分からないということがないよう、今まで読んだところを再度復習をしながら毎回進んでいきます。ゆっくり読みながら雑談会のようなものです。テキスト・資料をご用意してお待ちしています。

○映画会は昔の名画を上演しています。面白いです。懐かしいです。昔のスターはカッコよく美人です。

### 1・2月スケジュール

月 火 水

木 金 土 日

30	31	1月1日 新年祝祷会 10時半	2
映画会 お休み			
3	4	5	6
			映画会 お休み
10	11 読書会 13時半	12	13 映画会 13時半
17	18	19	20 映画会 13時半
24	25 読書会 13時半	26	27 映画会 13時半
31	2月1日	2	3 映画会 13時半
			4
			5
			6 写経会 13時半

#### 写経会

1月9日(日)  
2月6日(日)  
13時半

般若心経・自我偈・  
観音偈・方便品の手  
本を用意しています。

#### 読書会

1月11・25日(火)  
13時半

1月から「阿弥陀経」  
がテキストです。浄土  
の姿が描かれた経です

12月30・1月6日(木)

映画会  
お休みします

いつ頃までだったか、正月帰省の度にコリーナ近くの大槻の造り酒屋で搾りたての日本酒を6本購入していました。火入れをしない生原酒はすぐ変質してしまうため、自宅に戻り次第冷蔵庫に押し込んだものの、早くスペースを空けないと他のものが入れられないと言う理屈を付けて毎晩のように「搾りたて生原酒」を楽しんでいました。1月末には6本全て呑みきりまた翌年帰省するときまでのお楽しみとなっていたのです。

秋に収穫された新米を使って作られる日本酒がこの造り酒屋で初めて絞られるのは、毎年12月も半ばでした。詳しいことは分かりませんが、酒造りにふさわしい気温や湿度、杜氏の確保などの関係で初出荷はどうしても年末ぎりぎりになっていたと推察できます。また温度をコンピュータ管理できるような設備もなかった当時は、味も毎年異なっていたもので、去年と違う味にあれこれ蘊蓄を語り合いながら呑むことや、冬のわずかな期間しか味わえない限定感も搾りたて生原酒の大きな魅力でした。ところがここ最近は何の季節でも毎年安定した美味しさの搾りたて生原酒が味わえるのです。真夏でも酒蔵奥の大型冷蔵庫に保管された生原酒が購入できます。高レベルの美味しさも毎年一定で年による出来不出来の有り様はどこにもありません。まだ今年は出来ていないだろうと思いつつ、久しぶりにやって来る息子と父を交えた親子三代で味わうために12月18日に買いに行ったところ、嬉しいことに初搾りがあったのです。今年初搾りはいつからですかと聞いたところ11月の初旬ですとの言葉。驚きました。既に1ヶ月半前に味わうことができていたのです。正月帰省の度に楽しみだった「搾りたて生原酒」の味わいは今は昔、いつの間にか杜氏の経験知は学問成果に集約された醸造学とデータ蓄積されたAI値に取って代わられていたようです。日本酒も職人技だけに頼らない、生産技術による安定供給と高品質商品の提供が可能な産業に仲間入りしていたのです。これを「矢板大槻の地酒」と呼んで良いものか、大槻にもある「美味しい日本酒」と呼ぶべき存在なのか、迷うところです。

経験知からデータ値への移行は使い古された言葉で言えばアナログからデジタルへ、つまり人が物事を認識したり判断したりすることで得た「知」を価値や大きさなどの数値に「値」化したものへと変換することなのです。これにより個人のものであった「知」が可視化され、誰もがアクセスできる公共財となっていくのです。そしてこの潮流はグローバル化をおし進め、経済的にも政治的にも平準化された世の中を実現し、いずれは国や民族という概念が消滅する時代を招き行き着くところ、世界はひとつの米国か、はたまたひとつの中国になっているかもしれません。あるいはグローバル化に抵抗するナショナリズムが今よりもっと細分化された国を作り出すかもしれません。現在主権国家の数は196カ国です。うろ覚えですが私が6歳の頃覚えた世界の国旗国名は100カ国ほどだったと記憶しています。地球の土地 (land) の面積は変わらないのに地球の国 (state) の数は倍近く増えているのです。これからわたしたちの「国」はどこに向かうのでしょうか。

日蓮上人の名著「立正安国論」は打ち続く天変地異と社会不安について思索した結果、正法（法華経）に帰依する（立正）ことによって、国と民が安泰になる（安国）と確信して書かれた、鎌倉幕府への建白書です。上人自らが控えとして書いた真筆が国宝として現存しています。残念ながら私がこの真筆を拝読する機会は未だありませんが、いくつかの解説書を読むと上人はこの真筆の中で三つの「くに」を使い分けていたようなのです。「國」「国」「國」の三種の「くに」です。「國」は旧字体で「或」は不確かなもの、未知のものを示す語です。境を設けた地域を武器で守る意を表し「國」となったものと言われています。簡略体の「国」はその境を設けた地域の中に「玉」がいます。玉座という言葉あるように「王」が統治する「王」のための「国」です。古い文書では「玉」が「王」になっているものもあります。「國」は「民」が中に居ます。「民」のためにある「くに」という意味でしょうか。國はLand、国はState、國はNationの義であろうとする説があります。「國」は私たちの住む国土。「国」は主権の行き届く範囲、国家。「國」はその国土に住む国民や民族。その様に分類しています。これは非常に重要な視点だと思われまふ。満州侵略など、帝国軍の軍事行動の精神的バックボーンとなった日蓮主義が、国家主義思想として戦後の民主体制の中では強い非難を受けたことは日蓮上人の受難と言わなければなりません。「立正安国論」はまごうことなき国家主義の思想書です。しかしそれは過去から今に到るまで正しく読まれてきませんでした。「立正によって安国を実現する」その主体である「くに」を都合のよいうに解釈されてしまったからです。誤解か故意かは分かりませんが、日蓮上人の三つの「くに」を権力を行使する「国家」の文脈で一括りにして語られたことにあるのです。上人の國家主義は「民」の住む「国土（或）」が「正しい法（玉）」によって「安国」となるための思想です。国民と国土と国権力が正しい教え（正法）に帰依することで実現される「安国」、つまり私たちの住むこの娑婆世界に靈山浄土を現前させるための「くに」であり「國」「国」「國」なのです。

年によって味の異なる冬限定の「大槻の地酒」を心待ちしていた経験知の時代と、高品質の「大槻産の日本酒」をいつでも味わえるデータ値の時代は、経済のマクロ視点か個人嗜好のミクロ視点か、の対比ですから比較は意味のないことです。ただ私たちは足下から始めることしかできないのです。私たちの国土である「國」の現実の中で「国」という巨人に向かって、民衆のための「國」というミクロ視点をもって語った日蓮上人の「行い」は、2022年を迎える今も、私たちのはじめの一步であるべき行いです。琉游舎：戸井 出琉・恭子 矢板大槻コリーナ琉游舎から、新年も「豊かで楽しく安らかな」年であるように足下の一步を始めます。そして1年後もまた同じように大槻の搾りたて生原酒を味わいながら2023年を迎えようとしていることでしょう。